

青年期・成人期における愛着スタイルと心理的距離について

西川 七菜

(橋本尚子ゼミ)

はじめに

対人関係には、親子関係、友人関係、恋人関係といった関係がある。人が生まれて初めて築く関係は親子関係であり、その関係を経て友人関係や恋人関係を築いていく。成長するにつれて親以外の他者と親密な関係になることは重要なことであり、生きていくうえで必要な能力なのである。ゆえに、親以外の他者と親密な関係を築き、心理的距離の近い他者を作ることが重要であるといえる。さらに、幼いころ築いた愛着関係を基盤に人間関係を築いていくといわれていることから、愛着はその後の人生においてさまざまな影響を与えることがいわれている (Bowlby, 1969/1973)。他者と親密な関係を築きたいという親密欲求や、他者と親密な関係を築きたくないといった親密回避も愛着が関係している。また、青年期以降では親から自立していこうとする。親から離れ、友人や恋人といった親以外の他者との距離を縮める必要がある。そこで、親以外の他者である友人や恋人といった他者と関係を築くことが重要となってくる。そこで愛着スタイルと心理的距離に関連があるのではないかと考え、今回の研究を行う。

問 題

1. 愛着理論

Bowlby (1969) は、母親と子どもの間に結ばれる情緒的絆を愛着 (Attachment) と呼んだ。Bowlby によると、人間の愛着行動は、生まれてから3歳の終わり頃まで強くみられ、3歳以降では親以外の他者とも安心を感じるようになるといわれている。また、4.5歳以降、青年期以降、老年期以降と段階を踏んで愛着行動に変化が生じ、生涯にわたって愛着が続くのである。瀧川(2003)による愛着スタイルの研究でも愛着に連続性があることがいわれている。この研究は、青年期にあ

る被験者の幼少期の母親との関係を回想させることで幼少期の愛着スタイルを測定し、現在の愛着スタイルとの関連をみたものである。幼少期の愛着スタイルと現在の愛着スタイルに関連があり、親密さ欲求と共存欲求にも関連があった。つまり、幼少期の愛着が青年期にまで影響を及ぼしているのである。

Bowlby (1969) によると、3歳以降でその愛着を維持する場合、複雑な要素を組み合わせたり、様々な行動を用いたりして、愛着を表すといわれている。つまり、成人の愛着行動は幼児のように泣きわめいたり、しがみついたりといった顕著な行動はみられず、また、他者への配慮や自己防衛などが加わり、複雑な構造となっていくのである。

2. 内的作業モデル

Bowlby (1969, 1973) によると、愛着の様相は、行動レベルから対人認知としての表象レベルへと変化し、この様にして、愛着が内的表象として形成されていく。これが内的作業モデル (Internal Working Model) である。内的作業モデルに影響を与えるのが、乳児期までの親 (愛着人物) との相互関係である。愛着人物が応答してくれるという確信は次の2要因によって左右される。

- 1) 愛着人物が、支援や保護の求めに応じてくれる人であると判断されているか。
- 2) 自己が愛着人物から、助けを与えられやすい人物と判断されているか。

このように、「望まれない子ども」は、両親から望まれていないと感じるだけでなく、自分は誰からも望まれないと信じるようになる。「愛されている子ども」は、両親からも愛されていると感じていて、他の人からも愛される存在であると確信しているのである。つまり、この信念や確信が内的表象に影響を与えるのである。

3. 成人愛着研究

初期の愛着研究では、成人の愛着測定が非常に困難であったため、主に幼児と養育者間の関係性に着目したものが主流であった。例えば Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) の SSP (ストレンジ・シチュエーション法: Strange Situation Procedure) である。これは、乳児の母子との分離と再会の様子を観察し、反応パターンから3つの愛着スタイル (安定型: B. 回避型: A. アンビバレント型: C) に分けるといふものである。しかし成人では、愛着スタイルを行動で観察することは困難であるため、自己報告型の尺度法やインタビュー法を用いて、内的作業モデルを測定した。成人愛着研究は、幼児期に愛着対象との関係で形成された内的作業モデルを測定対象とすることで発展したのである。

Bowlby (1973) は、内的作業モデルを他者に関する作業モデルと自己に関する作業モデルの2要因からなるとしている。上述でいう1) が他者に関する作業モデルであり、2) が自己に関する作業モデルである。Bartholomew (1990) は、他者の内的作業モデル (他者観) と自己の内的作業モデル (自己観) が、ポジティブかネガティブかを捉え、その組み合わせを愛着スタイルとして以下の4つに分類し説明した。

- 1) 安定型: 自己と他者の内的作業モデルがポジティブである。
- 2) 愛着軽視型: 自己の内的作業モデルがポジティブで他者の内的作業モデルがネガティブである。
- 3) とらわれ型: 自己の内的作業モデルがネガティブで他者の内的作業モデルがポジティブである。
- 4) おそれ型: 自己と他者の内的作業モデルがネガティブである。

この理論に基づき、Brennan & Shaver (1998) が ECR (親密な対人関係体験尺度: Experiences in Close Relationships inventory) を作成した。成人愛着研究では、Haen & Shaver (1987) は、恋愛を愛着プロセス (romantic loves as a process of becoming attached) であると概念化したことから、恋愛対象への愛着スタイル測定が多く、恋人を対象とした尺度が数多く開発されてきた

(Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。しかし、加藤 (1998/99) は、初対面の段階から対人関係を形成していく場面や、親密さが明確でない場面での愛着行動を行う場面などで、他者との相互作用パターンを予測することは、恋人を対象とした愛着スタイル尺度では、困難であると指摘した。実際に、一般他者を想定した RQ 尺度 (対人関係尺度: Relationship Questionnaire, Bartholomew & Horowitz, 1991) である RQ-GO (Relationship Questionnaire-the-generalized-other-version) の日本語作成はすでになされているが、RQ-GO は、強制選択式であるため、愛着スタイルと他の変数の相関関係を捉える数量的分析に適していない。こうした問題を解決し、多項目式の尺度、ECR-GO (the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version) が作成された。ECR-GO とは、“親密性の回避”と“見捨てられ不安”の2次元から成人の愛着スタイルを測定する尺度である。この尺度では、自己の内的作業モデルは“見捨てられ不安”に対応しており、他者の内的作業モデルは、“親密性の回避”に対応することで、Bartholomew (1990) と同様の愛着スタイル4型に分類できる (図1)。Brennan et al. (1998) は、ECR 作成時に ECR と理論的に関連のある尺度である RQ (Bartholomew & Horowitz, 1991) を同時に実施し、ECR の妥当性を確認することで、Bartholomew (1990) の2次元・4分類モデルについて対応していることを示した (中尾・加藤, 2004)。

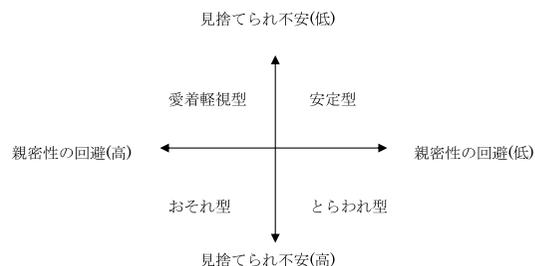


図1 Brennanらによる愛着スタイルの4類型

加藤・中尾 (2006) は、成人愛着スタイル (安定型: 拒絶型: とらわれ型: おそれ型) と愛着行動パターンとの関連についての研究において、目的修正協調性に注目している。成人の愛着行動には、

目的修正協調性 (goal-corrected partnership) (Bowlby, 1969) が備わっている。目的修正協調性とは、愛着人物の状況を洞察、自分の主観的安全感 (security) などを十分に考え、自身が愛着人物から最大限に愛情を得たり、主観的安全感を満たしたりするように愛着行動を調整することである。加藤・中尾 (2006) は、愛着行動を行う際に自分の主観的な安全感だけでなく、自他の適切な心理的距離 (以下: 対他調整) にも着目することが大切であるとし、次の2類に分類した。

- 1) 直接的愛着行動: 対他調整を適度にしつつも、安全欲求 (自分の主観的安全を得たいという欲求) を直接的に表現する愛着行動。
- 2) 間接的愛着行動: 対他的調整を過剰にしてしまうために、それにとらわれ、安全欲求を間接的に表現する (あるいはしてしまふ) という愛着行動。

研究の結果、安定型は、対他調整にあまりとらわれず、直接的愛着行動を用いやすい。拒絶型は、対他調整にあまりとらわれず、愛着行動を行にくい。とわられ型は、対他的調整にとらわれやすく、直接的愛着行動を用いやすい。おそれ型は、対他調整にとらわれやすく、拒絶型に比べて愛着行動を行おうとする。対他調整にとらわれやすいためには生じる影響は、とわられ型の場合、必要以上に自己防衛を行ってしまう。おそれ型の場合、愛着行動を抑制してしまう。このことから、対他調整ができるかできないかで愛着スタイルにも違いがみられることがわかる。つまり、愛着スタイルについて研究する上で心理的距離に着目することは有意義であるといえる。

4. 心理的距離

対人関係における自他の距離には物理的な対人距離である対人間距離と、心理的な対人距離である心理的距離がある。心理的距離という概念についての研究がされてきたのは1980年以降である。心理学的研究における心理的距離の研究に発達心理学的研究がある。天貝 (1996) は、心理的距離は「親密さの程度」と「他者との融合の程度 (依存性)」の2側面からとらえることのできる現象であるとしている。自分を中心として、9.5cmの線分に相手 (友人・家族) の位置を投影させる方

法で測定し、それによって測定された心理的距離と個人内要因との関連をみた研究である。

5. 青年期の親子・友人関係における研究

親子・友人関係の研究において心理的距離を扱っているものがある。金子 (1989) は、青年期女子 (高校生と大学生) を対象に親子・友人関係における心理的距離の研究を行った。「依存性」と「疎外感」と「孤独感」を心理的距離の概念とした。その結果、女子高校生・女子大生ともに親よりも親友との心理的距離が近く、また、共に父親との心理的距離が遠かった。女子高校生に比べて女子大生の方が母親との心理的距離が近かった。女子大生では親友との心理的距離と母親の心理的距離に相関がみられた。つまり、青年期女子は年齢を重ねるごとに母親との心理的距離が近くなるが、親よりも親友との心理的距離が近くなる。この研究は女子を対象に行っているので性差をみることはできなかった。岡本・上地 (1999) は中学生・高校生を対象に親子・友人関係と発達の変化の関連について研究を行い、その際に心理的距離を扱っている。母親との心理的距離の近さは、中学生では男子よりも女子の方が近かった。さらに母親と女子の心理的距離は中学生よりも高校生の方が近く、年齢が上がるごとにその距離が近くなることがわかった。父親との心理的距離は中学3年生以降徐々に近くなっていく。女子よりも男子の方が近い。また、親子関係と友人関係の関連から、男子は父親からの脱依存が、女子は母親からの脱依存が同性との親密さを促す、あるいは同性との親密な関係が脱依存を促すことが推測された。また、友人が異性である場合特に同性の親からの脱依存を促す、あるいは異性の友人との親密な関係が同性の親との脱依存を促すと推測される。つまり、親以外の人と親密な関係を築くことが親からの脱依存につながるという。

この2つの研究からわかることは、中学生以降では、親よりも友人との心理的距離が近くなる。女子は父親との心理的距離が遠い。女子と母親の心理的距離は中学で遠くなるが次第に、近くなっていく。親との心理的距離が近ければ友人との心理的距離が近く、遠ければ遠くなるという関連がある。しかし、この研究は10年以上前のもの

であるため変化がみられる可能性がある。

青年期ごろになると親の意見に疑問を持つようになり、徐々に自立の意識が芽生えてくる。Blos (1985) は、青年期を「第二の個体化」と名付けている。すなわち、親から心理的に離れ、個を確立し、自立を目指す時期であるとしている。落合 (1996) は、児童期までの対人関係の中心が親子関係であったのが、青年期では友人関係に変化していき、友人関係を築くことで自己を見出していくとしている。また、青年期では、友人や恋人が心の頼りとなるとしている。つまり、親から自立し、自立しようとするとき、親以外の他者を頼り、その他者との間に関係を築いていくということである。谷井 (2006) の親子関係に関する研究によると、児童期では親への依存を基調とし親との関係が比較的安定し、中学中学年から高校中学年になると親への反発や批判を強め衝突し、高校高学年以降では、親への受容や理解が強まり再び安定していくという段階があることがわかった。男子では母親と心理的距離を保ちながら自立性を獲得していくのに対し、女子では母親に依存して自立性を獲得していくことがいわれている。

親子・友人関係の研究からわかることは、個人が自立しようと心理的に親から離れだしたときから、友人や恋人と親密な関係を築く。ゆえに、親から分離することが友人との親密な関係を促すのである。しかし、親と分離したり友人と親密な関係を築いたりするには、自立の意識が芽生える以前に親との心理的距離が近い関係であることが重要なのである。

仮 説

今回の研究では青年期から成人期に移行する時期の愛着スタイルと心理的距離についての研究を行う。まず、10年前では、この時期の心理的距離の近い他者が親よりも友人であったが、変化はみられるのか。そして、最も心理的距離の近い他者と愛着スタイルに関連があるか。以下の3つの仮説について検討を行う。

仮説1として、金子 (1989)、岡本・土地 (1999) の研究でもみられたように親以外の友人や恋人が最も心理的距離の近い他者になると考える。

仮説2として、最も心理的距離の近い他者が誰

であるかと愛着スタイルのあり方に関連があると考える。加藤・中尾 (2006) の研究において愛着行動と対他調整に関係があったことがわかっている。対他調整とは自他との心理的距離を調節することであり、対他調整にとらわれにくいタイプととらわれやすいタイプとで心理的距離の近い他者が誰であるかに違いがみられるのではないかと考える。対他調整にとらわれにくいタイプは安定型と拒絶型、とらわれやすいタイプはとらわれ型とおそれ型である。

仮説3として、愛着スタイルと最も心理的距離の近い他者のそれぞれに性差がみられると考える。金子 (1989)、岡本・土地 (1999) の研究でもみられた通り、男性よりも女性の方が心理的距離は近くなり、結びつきが強いといわれている。さらに、女性は年齢が上がるごとに母親との心理的距離は近くなっていく結果もみられているので、性差がみられるのではないか。

方 法

被験者 被験者は大学生95名 (男性55名、女性40名、平均年齢20.2歳) であった。

手続き 大学の授業において質問紙を配布して実施した。中尾・加藤 (2004) が作成した、一般他者を想定した愛着スタイル尺度である ECR-GO と、天貝 (1996) の作成した投影法による心理的距離の測定を使用した。

調査期間 2012年11月上旬～11月末に調査、回収した。

質問紙 質問紙は、フェイスシート (年齢、性別、家族構成、現在の暮らし方、現在の恋人の有無) と一般他者を想定した愛着スタイル (ECR-GO)、天貝 (1996) の投影法による心理的距離の測定である。一般他者を想定した愛着スタイル尺度は、「見捨てられ不安」(「私は見捨てられるのではないかと心配だ」, 「私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」など) の18項目と、「親密性の回避」(「私は人に心を開くのに抵抗がある」, 「私はあまり人と親密にならないようにしている」など) の12項目からなる。評定は、7件法 (1 = 「全くあてはまらない」から7 = 「非常によくあてはまる」) を用いた。心理的距離の測定においては、図2のような線分を用いた。「次にあげ

青年期・成人期における愛着スタイルと心理的距離について

それぞれの人は、あなたからどのくらいの距離にいますか。印をつけてください。」という指示のもと、「母親」「父親」「恋人」「友人」「その他」のそれぞれの心理的距離を示すよう求めた。「その他」の項目では被験者に自由に対象を決めさせた。また、それぞれの理由を記述形式とし、記入するよう求めた。

図3に示したように、見捨てられ不安尺度と親密性の回避尺度の α 係数を算出したところ、見捨てられ不安($\alpha = .83$)、親密性の回避尺度($\alpha = .92$)共に高い信頼性が得られた。図8は見捨てられ不安の高低、親密性の回避の高低を示したもので、

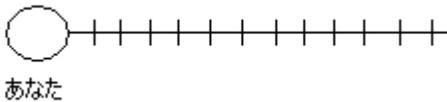


図2 心理的距離を測定する際に使用した線分結果

信頼性統計量	
Cronbach のアルファ	.832
Cronbach のアルファ	.925

図3 信頼性分析

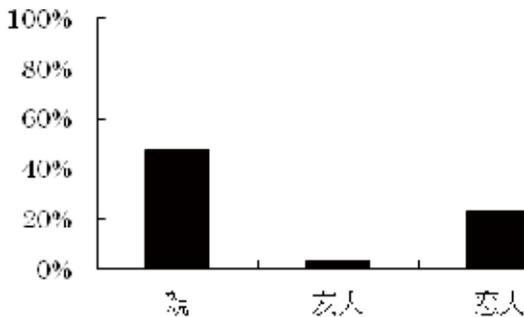


図4 全体

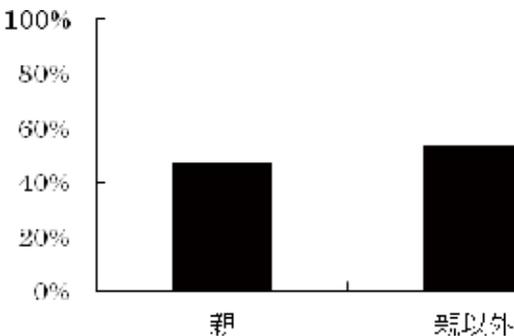


図5 親と親以外

つまり見捨てられ不安が低く、親密性の回避が低ければ安定型、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が低ければとらわれ型、見捨てられ不安が高

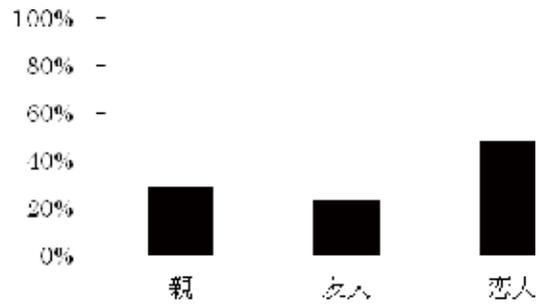


図6 恋人あり

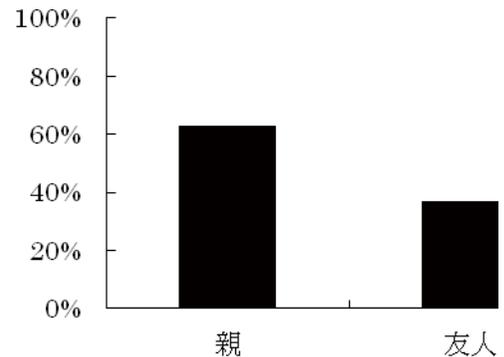


図7 恋人なし

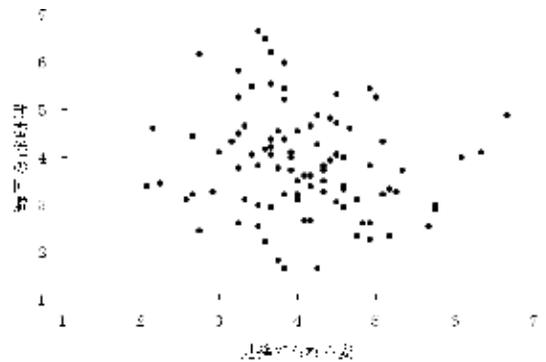


図8 愛着スタイル

	親	友人	恋人
安定型	-2.9	1.3	.5
愛着軽視型	1.3	-1.1	.9
とらわれ型	2.0	.0	-1.9
恐れ型	-.8	-.1	.6

図9 調整済み残差

く、親密性の回避が高ければ愛着軽視型、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が高ければ恐れ型になるという、Brennaら（1998）による愛着スタイルの分類基準に従って4分類の愛着スタイルに分けた結果である。図9は、愛着スタイルと最も心理的距離の近い他者との関連について χ^2 検定行って得られた調整済み残差の数値を示したものである。とらわれ型の母親との心理的距離に対する理由として、「近くにいる」「良く話す（何でも話せる）」「支えてくれる」「身近に感じる」「人生で最も関わった人であるから」「愛情を感じるから」などで、友人の心理的距離に対する理由として、「気を使う」「距離を置いてしまう」「互いに心を開き合えることが少ない」であった。おそれ型の母親との心理的距離に対する理由として、「心配してくれているのがわかる」「相談しやすい」「家事を手伝ってくれる」「あまり深い話をしない」「身近な存在」「適度な距離にいる」などで、友人の心理的距離に対する理由として、「話しやすい」「素で話す」「他人に自分を見せたくない」であった。愛着軽視型の母親との心理的距離に対する理由として、「何でも話せる」「適度な距離である」「よく頼る」「母親に話さないことはない」「できれば一生一緒にいたい」「付かず離れずの距離である」友人の心理的距離に対する理由として、「あまり会わない」「相手に興味が無い」「よく話すから」「全てを見せていない」「信頼できる」であった。安定型の母親との心理的距離に対する理由として、「困った時に助けてくれる」「何でも話す」「頼られている」「頼れる」などで、友人の心理的距離に対する理由として、「常に隣にいる感じがする」「必要以上に近くない」「何でも話せる」「気が合う」「笑いあえる」「相談に乗ってくれる」であった。

全体の最も心理的距離の近い他者が親であったのは約47%、友人であったのは約30%、恋人であったのは約23%となり、親、友人、恋人の順となった（図4）。最も心理的距離の近い他者を親と親以外に分けると、親以外は約53%となった（図5）。図6、7は最も心理的距離の近いものを恋人がいる人といない人にわけた場合の結果である。恋人がいる人の最も心理的距離の近い他者が親であったのは29%、友人であったのは23%、

恋人であったのは48%となり、恋人、親、友人の順であった。恋人のいない人の最も心理的距離の近い他者が親であったのは67%、友人であったのは37%となり親、友人の順であった。恋人がいる人は、全体の40%であった。

愛着スタイルと他者との心理的距離に関連があるかを調べるために χ^2 検定を行った。その結果、愛着スタイルと最も心理的距離の近い他者の関連に有意な傾向がみられた（ $\chi^2(9)=0.98, p<.1$ ）。残差分析の結果、愛着スタイルがとらわれ型で、最も心理的距離の近い他者が親であった場合に有意差がある傾向がみられた。最も心理的距離の近い他者を母親と母親以外に分けた場合、愛着スタイルとの関連に有意な差はみられなかった（ $\chi^2(3)=19, ps$ ）。最も心理的距離の近い他者を母親と父親に分けた場合にも、愛着スタイルとの関連に有意な差はみられなかった（ $\chi^2(6)=47, ps$ ）。性差との関連をみると、最も心理的距離の近い他者と性差に関連はなく（ $\chi^2(3)=.23, ps$ ）、最も心理的距離の近い他者を母親か母親以外かで分けた場合の性差に関連はなかった（ $\chi^2(1)=.83, ps$ ）。 χ^2 検定では、すべて期待度数が5未満だった。

考 察

1. 仮説1

最も心理的距離の近い他者が親であったのは親、友人、恋人の順となり、親と回答した人は約半数であった。しかし、最も心理的距離の近い他者を親と親以外に分けた場合は、親以外の方が多くなり、仮説1は部分的に支持された。

過去のデータと比較してみると、金子（1989）と岡本・上地（1999）が行った研究結果では、中学生頃になると親との距離が離れ、高校生ごろになると再び近づきだし、大学生になると高校生の頃よりも親と近くなるが、友人よりは近くならないという見解が得られたが、今回の結果では友人よりも親である人が多かった。10年ほど前に比べて、大学生にとって友人よりも親が身近な存在になっていると言える。私たちは他者との関わりにおいて自己を見出したり、自己を確立したりする。自分を見つめるための存在としてまず友人という存在が必要となってくる。しかし、自己を見出したり、自己を確立するには、他者とぶつかり

他者に対して嫌悪感を抱いたり、その関係が煩わしく感じたりすることもある。そのため、友人との距離は近すぎても遠すぎてもならず、適度な距離でいることが安定した友人関係でいることに必要なのではないか。また、多種多様な価値観があり、人の数だけ価値観が存在することも、他者と親密な関係を築くことを困難にさせているのではないか。グローバル化がすすみ、日本独自の価値観だけでなく、世界中の価値観を共有できるようになっている。そのため友人と親密な関係を築くことよりも生まれた時から多くの同じ時間を共有している親の方が、親密な関係を持ちやすいのではないか。

また、青年期延長説（青年期と成人期の境が曖昧で、30代頃まで青年期であるといわれている）などがあることから、自立への過程に大きな変化がある（例えば、心理的分離をしなくなった、親の価値観に疑問をもたなくなった、など）ことや、自立しようとしていない（精神的分離に至っていない）ことなどが考えられる。親との心理的距離が離れにくくなったことにより、徐々に親から自立する必要性もなくなってきていることがいえるのではないか。昔に比べて豊かな環境になっている現代では、子どもが社会人になってからも実家で生活していれば、経済的に苦しくなることは少ない。よって子どもも家を出て自立した生活を送る必要性を感じることも少ない。そのため、親にとって子どもはいつまでも家にいていい存在となり、子どももいつまでも家にいられると感じることが考えられる。子どもが成長してからも、親が子どもの世話をしたり、干渉したりすることで、親は昔に比べて子どもが自立していくような教育をしなくなり、自立が遅くなっていることも考えられる。ゆえに、親から心理的に離れる時期が、より遅くなっている可能性があり、青年期以降の親子関係も考える必要がある。

恋人がいる人といない人でわけた場合、恋人がいない人では友人よりも親の方が最も心理的距離の近い他者となった。しかし、恋人がいる人では親や友人よりも恋人の方が最も心理的距離の近い他者となった。これは親が恋人と、もしくは恋人が親と同様な性質の関係を築くことを示しているのではないか。恋人がいない人でも過去に恋人が

いた経験のある人は存在したのかもしれない。その恋人と別れることによって恋人が最も心理的距離の近い他者でなくなったら、親が最も心理的距離の近い他者となりうるのかもしれない。

2. 仮説2

愛着スタイルと最も心理的距離の近い他者との関連に有意な傾向がみられ、とらわれ型と最も心理的距離の近い他者が親である場合にのみ有意差がある傾向がみられた。仮説2は部分的に支持された。このことから最も心理的距離の近い他者が母親でとらわれ型以外は、親以外の他者とも親密な関係を築くことができるといえる。とらわれ型は、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が低いタイプであることから、親に見捨てられることへの不安、その関係を維持していくことへの不安があり、親に心を開くことに抵抗がないと解釈できる。このタイプにのみ、最も心理的距離の近い他者を親とする人が多かった。また、とらわれ型の母親との心理的距離に対する理由として、「身近に感じる」といったような意見が多かった。友人との心理的距離に対する理由として「距離をおいている」といった意見が多く、母親を身近に感じ友人との関係をわずらわしく感じている人が多かった。とらわれ型以外の愛着スタイル（安定型・愛着軽視型・おそれ型）では、母親との心理的距離に対する理由として「適度な距離」であると感じているという、とらわれ型ではみられなかった意見があった。このことから、とらわれ型は、母親との関係が密接になることを求めているといえる。とらわれ型は、親以外の人と親密な関係を築けない、もしくは築こうとしない傾向があるといえる。

心理的距離との関連だが、加藤・中尾（2006）の研究ではとらわれ型とおそれ型は対他調整にとらわれやすいとしている。しかしおそれ型と心理的距離との関連がみられなかったため、対他調整とは関連がないといえる。発達的变化の観点から考えると、まだ親子関係から友人関係へ移行できていないことが考えられる。親子関係から友人関係に移行する時期に、親よりも友人などの他者を心の頼りにしたり、親と衝突するという経験の後には親を理解し、受容したりできるようになると考

えるならば、このタイプにおいては、親よりも距離の近い他者の存在ができたり、親と衝突したりすることは、親から見捨てられるかもしれないという不安が強くなるのかもしれない。そのため、親以外の他者と親密な関係を築くことができないのではないか。また、親密性の回避が低いことから、親との親密な関係を求めていることも考えられるので、とらわれ型にとって親との距離が近いことは安定した関係なのかもしれない。また、愛着スタイルと最も心理的距離の近い他者を母親と母親以外の他者で分けた場合、最も心理的距離の近い他者を母親と父親で分けた場合の関連はみられなかった。このことから、母親が独立で子どもの愛着スタイルに影響を与えることはなく、影響を与えるならば母親と父親共に与えるということがわかる。

3. 仮説3

性差との関連をみると、最も心理的距離の近い他者に性差に有意な差はなかった。また、最も心理的距離の近い他者を母親か母親以外かで分けた場合の性差に、関連はみられなかった。仮説3は支持されなかった。つまり、母親と娘または息子との心理的距離の違いはなく、父親と娘または息子との心理的距離の違いはなかった。これもまた金子(1989)と岡本・上地(1999)の研究結果と違う結果になった。金子(1989)と岡本・上地(1999)は、母親と娘の心理的距離が母親と息子に比べて近くなるとしていたが、性差はみられなかった。また、父親と娘の心理的距離が父親と息子、母親と娘に比べて遠くなるとしていたが、母親と父親に分けた場合にも関連がみられなかったため、父親と母親の心理的距離は同じくらいであることがいえる。つまり、10年ほど前に比べて父親と娘の心理的距離が非常に近くなったことがいえる。近年イクメンと呼ばれる父親が増えたこと、そのことで子どもと関わる父親が増えてきたことや、徐々に父親の威厳がなくなってきていることが変化の理由として考えられる。そのことにより、10年以上前に比べて父親と関わろうとしたり、仲良くしたりする娘が増えたのではないか。また、子どもにとって父親と母親に特別な違いがみられなくなったのではないか。

今後の課題

今回の研究では、愛着スタイルと心理的距離の関連について調べ、有意な傾向がみられたが、その要因を見いだせなかった。幼少期の愛着や、他者との関係や他者に対する具体的なイメージを調べることでその要因を見いだせるのではないか。また、過去のデータである、金子(1989)と岡本・上地(1999)の親子・友人関係と心理的距離の研究結果と比較して変化がみられた。以前は青年期・成人期の心理的距離の近い他者は親より友人であったが、今回の結果では友人より親であった。また、以前は青年期・成人期の女性の心理的距離の近い他者が父親より母親であったが、今回の結果では有意差がみられなかった。つまり、以前と比べて、親との距離が近くなり、友人との距離が遠くなり、娘と父親の距離が非常に近づいたのである。これらの変化から、親や友人との関わり方の変化があったといえる。これらと、もう一方の過去のデータである、岡本・上地(1999)の研究で、同性の親との脱依存が自立へつながるという見解を見出していることをふまえると、心理的距離の近さが母親と父親で違いがみられなかったことから、自立の過程に変化がみられる可能性がある。そのため、再び心理的距離と自立の過程を以前の研究と比較する必要があるだろう。また、親に依存していた個人が自立に向けて分離し、友人と親密な関係を結び、その後徐々に親との距離を縮めていく。このそれぞれの段階を早期に終え、大学生ごろには親との距離が再び近くなることも考えられる。同時に、中学生・高校生への調査が必要となってくる。また、世代間で母親や父親、友人に対する存在意義・イメージ、など違いがみられることが考えられる。そのことをみていくことで、時代の流れでどのような変化があったのかわかるのではないか。

また、とらわれ型において、最も心理的距離の近い他者を母親とする人が多いことから、とらわれ型は母親のことをどう思うのか、母親との関係についてどう思うのかなどを詳しくみていき、この2者間の関係を検討する必要がある。近年特に仲の良い親子が多くなっており、その関係はマザコンや友達親子と呼ばれるようにまできて

いる。この関係についてもとらわれ型と母親の関係を詳しく見ていくことで解明されるところがあるのではないか。

参考・引用文献

- Bowlby, j. (1969) Attachment and loss. vol.1. Attachment. New York :Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1976 母子関係の理論 1 岩崎学術出版社)
- Bowlby, j. (1973) Attachment and loss.vol.2. Separation. New York :Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論 2 岩崎学術出版社)
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978) Patterns of attachment: A psychological study of strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Hazan, C ., & Shaver, P (1987) Conceptualizing romantic love as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology,52, 511-524.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998) Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J.A.Simpson&W.S.Rholes (Eds.) Attachment theory and close relationships. New York:The Guilford Press. P46-76
- Batholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991) Attachment styles among young adults: A test of a four-category model Journal of Personality and Social Psychology 61 Pp.226-244
- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究 29 2 p130-134
- 岡本清孝・上地安昭 1999 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究 47 2 p248-258
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究 44 1 p55 - 65.
- 金子俊子 1989 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学会研究 3
- 瀧川由美子 幼少期のアタッチメント形成が与える影響について－幼少期のアタッチメントの連続性から考える－ 奈良文化女子短期大学紀要 34 p41-47
- 谷井淳一 2006 青年期の適応と親子関係に関する研究 一親役割診断尺度の開発とその活用 一 早稲田大学教育学研究科 博士論文概要書
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究科 5 p19-27
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語作成の試み” 九州大学心理学研究 75 2 p154-159